

寄託一四九 上野虎四郎家文書

江戸時代に宇都宮宿の間屋や本陣を勤めた上野家から、江戸時代以降の文書七〇四三点が当館に寄託されています。

江戸時代の宇都宮は、宇都宮城の城下町や二荒山神社の門前町であると同時に、日光街道と奥州街道が分岐する宿場でもありました。天保十四年（一八四三）の宇都宮宿の人口は六四五七人、家数は一二一九軒でした（『宿村大概帳』）。本陣は二軒あり、そのうち上野家は伝馬町本陣を勤めました。

宿場の重要な役割に、人馬継立（人馬を提供して公用旅行者や荷物を次の宿場へ引き継ぎ送っていくこと）と休泊の二つがあります。問屋は人馬継立や休泊の事務を管轄する宿役人、本陣は大名・幕府の役人・公家などの休泊施設です。両方を勤めた上野家には、宇都宮宿に関する文書が数多く残されています。

特に注目すべきは、本陣に関する文書の豊富さです。明治時代の初め頃に上野新一郎が作成した「奉歎願覚」（No.二一八）には、新一郎の祖父作平が文化十一年（一八一四）に本陣を仰せ付



写真1 〔本陣宿札〕
(No.11)

けられ、新一郎まで三代にわたって勤めたと書かれています。それを裏付けるかのように、年代が分かる上野虎四郎家文書の本陣関連文書は、大部分が文化十一年以降のものであります。例えば、「諸家様御休泊宿料御旅籠控帳」は、表題が若干異なるものもありますが、文化十一年から慶応四年（一八六八）

までの分が断続的に残っています。本陣を利用した月日、利用者の名前、利用料などが記載され、本陣の利用状況を知ることができます。写真1の木札は宿札です。大きさは縦七一・五cm×横一八・二cmです。宿札は、本陣に誰が休泊しているかを示す標識で、本陣の前や宿場の出入口に立てられました。裏面に「天保十五年甲辰八月廿日御帰城御泊 御本陣上野新右衛門良信勤之」と書かれています。出羽国由利郡矢島（現秋田県由利本荘市）八〇〇石を領有した交代寄合（禄高三〇〇石以上の無役の旗本で参勤交代を行うもの）生駒親道と推定できる「生

駒主殿」が、帰城の途中天保十五年八月二十日に本陣に宿泊した際作成されたと考えられます。また、年代は不明ですが、本陣の間取図である「御本陣古絵図」（写真2）や、各部屋の畳の種類や床の間の造りなどが記された「伝馬町御本陣」（No.口二〇五）など、本陣の構造に関する文書もあります。

上野家が問屋を勤めた具体的な時期は不明ですが、上野虎四郎家文書を見ていると、上野家が本陣を勤めていた時期と重なる印象を受けます。「本陣問屋」として上野家が記されている文書もあり、本陣と問屋を兼務した時期があったことは確かです。問屋関連文書には、宿場の運営費に関する文書の控がまとめられた「宿方勘定帳」や、人馬賃銭に関する文書、助郷（宿場に備えられた人馬だけでは継立に対応できない場合に補助的に人馬を提供する村、またその負担のこと）に関する文書などがあります。

（阪下 京子）

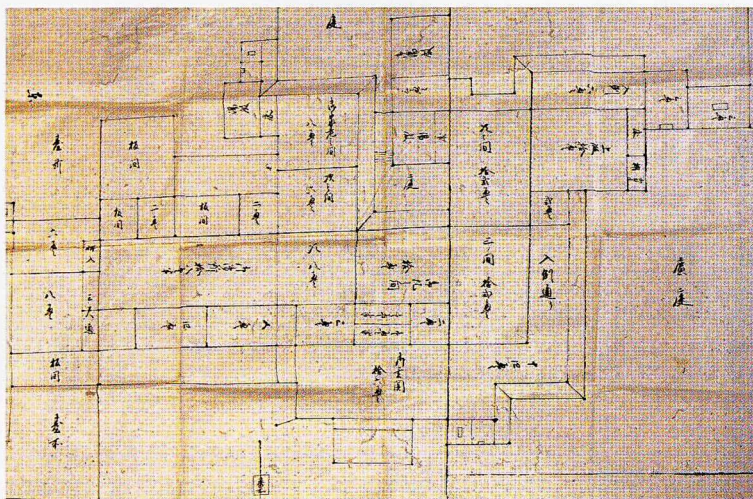


写真2
御本陣古絵図（部分）
(No.イ978)